梶井基次郎全集　第一卷

筑摩書房版

梶井基次郎全集第一卷

昭和四十一年四月二十日第一刷發行
昭和四十九年六月二十日第十二刷發行

著者　梶井基次郎
編集者　淀野隆三
　　中谷孝雄
發行者　井上達三
印刷者　白井倉之助
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一－九一
電話　東京（二九一）七六五一
振替　東京　四一二一三
印刷　株式會社　精興社
製本　株式會社　鈴木製本所

（分類）0393（製品）70401（出版社）4604

目次

作品

檸檬……五
城のある町にて……一五
泥濘……五一
路上……六三
橡の花……七一
過古……八九
雪後……九五
ある心の風景……一〇九
Kの昇天……一二五
冬の日……一三七

蒼　穹……一五九
筧の話……一六五
器樂的幻覺……一七一
冬の蠅……一七七
ある崖上の感情……一九三
櫻の樹の下には……二一三
愛　撫……二一九
闇の繪卷……二二七
交　尾……二三五
のんきな患者……二四五

習　作

詩二つ……二七三
小さき良心……二七六
不　幸……二八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

卑怯者……二九二
大蒜……三〇四
彷徨……三一四
裸像を盗む男……三二一
鼠……三三〇
カッフェー・ラーヴェン……三三二
母親……三三六
奎吉……三四一
矛盾の様な眞實……三四六
瀬戸内海の夜……三五三
歸宅前後……三五九
太郎と街……三七七
瀬山の話……三八一
夕凪橋の狸……四一五
貧しい生活より……四二八

犬を賣る露店……四三六
雪の日……四四七
汽車　その他……四五六
凧……四五八
河岸　一幕……四六三
攀ぢ登る男　一幕……四七五
編者註……四九〇
後記……五〇三

梶井基次郎全集　第一卷

作

品

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

檸

檬

大正十三年十月稿　＊『青空』大正十四年一月創刊號　＊昭和六年五月武藏野書院版『檸檬』に收む　＊昭和三十三年未來社版『日本詞華集』

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終壓へつけてゐた。焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか――酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相當した時期がやつて來る。それが來たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神經衰弱がいけないのではない。また脊を燒くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音樂も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。蓄音器を聽かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し續けてゐた。

何故だか其頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覺えてゐる。風景にしても壞れかかつた街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが轉してあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に歸つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家竝が傾きかかつてゐたり――勢ひのいいのは植物だけで、時とすると吃驚させるやうな向日葵があつたりカンナが咲いてゐたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不圖、其處が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙臺とか長崎とか――そのやうな市へ今自分が來てゐるのだ――といふ錯覺を起さうと努める。私は、出來ることなら京都

から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安靜。がらんとした旅館の一室。淸淨な蒲團。匂ひのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其處で一月程何も思はず横になりたい。希はくは此處が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覺がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の繪具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覺と壞れかかつた街との二重寫しである。そして私はその中に現實の私自身を見失ふのを樂しんだ。

私はまたあの花火といふ奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つぽい繪具で赤や紫や黄や靑や、樣ざまの縞模樣を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戰、枯れすすき。それから鼠花火といふのは一つづつ輪になつてゐて箱に詰めてある。そんなものが變に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろと云ふ色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めて見るのが私にとつて何ともいへない享樂だつたのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇つてくる故だらうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覺が漂つて來る。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める爲には贅澤といふことが必要であつた。二錢や三錢のもの——と云つて贅澤なもの。美しいもの——と云つて無氣力な私の觸角に寧ろ媚びて來るもの。——さう云つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例へば丸善であつた。赤や黄のオードコロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模樣を持つた琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小

刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買ふ位の贅澤をするのだつた。然し此處ももう其頃の私にとつては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、學生、勘定臺、これらはみな借金取の亡靈のやうに私には見えるのだつた。

ある朝——其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を轉々として暮してゐたのだが——友達が學校へ出てしまつたあとの空虛な空氣のなかにぽつねんと一人取殘された。私はまた其處から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を追ひたてる。そして街から街へ、先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、たうとう私は二條の方へ寺町を下り、其處の果物屋で足を留めた。此處でちよつと其の果物屋を紹介したいのだが、其の果物屋は私の知つてゐた範圍で最も好きな店であつた。其處は決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物は可成勾配の急な臺の上に竝べてあつて、その臺といふのも古びた黑い漆塗りの板だつたやうに思へる。何か華やかな美しい音樂の快速調の流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まつたといふ風に果物は竝んでゐる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれてゐる。——實際あそこの人參葉の美しさなどは素晴しかつた。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

また其處の家の美しいのは夜だつた。寺町通は一體に賑かな通りで——と云つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んでゐるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出てゐる。それがどうした譯かその店頭の周圍だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二條通に接してゐる街角になつてゐるので、暗いのは當然であつたが、その隣家が寺町通にある家にも拘らず暗かつたのが瞭然しない。然し其の家が暗くなかつたら、あん

なにも私を誘惑するには至らなかつたと思ふ。もう一つは其の家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のやうに——これは形容といふよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げてゐるぞ」と思はせる程なので、廂の上はこれも眞暗なのだ。さう周圍が眞暗なため、店頭に點けられた幾つもの電燈が驟雨のやうに浴せかける絢爛は、周圍の何者にも奪はれることなく、肆にも美しい眺めが照し出されてゐるのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで來る往來に立つて、また近所にある鑑屋の二階の硝子窓をすかして眺めた此の果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

その日私は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい檸檬が出てゐたのだ。檸檬など極くありふれてゐる。が其の店といふのも見すぼらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一體私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの繪具をチューブから搾り出して固めたやうなあの單純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。——結局私はそれを一つだけ買ふことにした。それからの私は何處へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を壓へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んで來たと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——或ひは不審なことが、逆説的な本當であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不可思議な奴だらう。

その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐていつも身體に熱が出た。事實友達の誰彼に私の熱を見せびらかす爲に手の握り合ひなどをして見るのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com